

「Fintech現象」 について思う

執行役員

小粥泰樹



最近の金融業界のバズワードに、「Fintech（フィンテック）」や「金融とIT（情報技術）の融合」がある。モノを商品とする製造業などに比べて、情報のやり取りを中心とした金融業は本質的にITとの親和性が高い業界であり、業務の効率性向上の面でも、対顧客サービスの高度化の面でもITは大いに貢献してきた。しかし、このところの金融業界におけるITへの関心の高まりは、ITをいかに活用するかという従来の視点とは少し異なり、ITが大きく変えようとしている金融ビジネスの動きにいかについでしていくのか、という幾分IT脅威論ともいうような感覚に後押しされている感がある。

ITが金融サービスの本質を変え、金融業界の勢力図まで一変させてしまう可能性として、さまざまなことがいわれている。その中で今日、銀行で最も注目されている分野の一つに小口決済がある。現時点では大きな脅威とはなっていないものの、アップルペイやグーグルウォレットなど膨大な個人顧客のアカウントを有する大手IT企業が資金決済分野で存在感を高めることになれば、銀行の存在は顧客から見てどんどん裏方に追いやられていくこととなる。最近では、前払い型電子マネーの普及に加え、ビットコインなどの仮想通貨まで登場してきている。このように、銀行以外が主体になった広義の資金決済サービスは、ITの進歩に伴って拡大する一方である。

小口決済の分野だけではない。インターネットなどの普及が資金需要者と資金供給者の間のマッチングコストを劇的に低下させ、クラウド・ファンディングのような直接的な資金調達の可能性も生み出している。個人や企業の信用

状況を把握する上で不可欠な日々の経済活動の電子ログは、今やそれらと直接的に取引する店舗やオンラインサイトの方が、金融機関よりも豊富に有している。ビッグデータなど、豊富なデータを分析して意味ある情報を取り出す技術が進歩するに従い、個人や企業に対する信用供与の主体として、銀行以外の存在感が高まっていくことは必至である。

ただし、このようにITが金融サービスを本質的に変容させてしまうという指摘自体は、最近に始まった話ではない。ITが進歩し社会的に普及度を高めていくことで、人や企業の関係性が変化し、社会そのものが変容していく。そして、変化に対応するためにまた新たなITの進化が求められ、次なる社会へのベースを形作っていく。この自己増幅型のサイクルは、ITに備わった基本的な特徴である。

ITによってもたらされる近未来像が、金融機関の経営者にとってこれまでになく現実味を帯びて迫ってきているのは、このITの自己増幅型サイクルが従来ない大きさや強さ、速さで回り始めたからである。金融業界におけるITの自己増幅現象を仮に「Fintech現象」と呼ぶならば、「Fintech現象」が際立った水準へと増長してきたからと言い換えてもいいだろう。

「Fintech現象」の増長は小口資金決済や資金仲介の分野に限らず、さまざまな領域においてさまざまなスケールで観察できる。たとえば、株式の取引インフラ。アルゴトレードの普及や取引所のシステム能力向上によって取引件数が増加する一方、膨大に膨れ上がった取引件数や取引のスピードについていけない市場参加者は淘汰されてしまう。この執行パフォーマンスに

関する競争は、まだまだ自己増幅的に成長している段階である。

より大きなスケールで見れば、グローバルな金融市場全体の不安定性も、「Fintech現象」の一つといえる。昨今、グローバル金融市場において、各国の市場連動性は高まる傾向にあるといわれており、その要因の一つとして、瞬時に世界中に情報を行き渡らせるITの高度化があることは誰も疑わないであろう。全世界的な市場のシンクロ（同調）は市場効率性を高めるかもしれないが、同時に大規模に不安定化する可能性も高めてしまう。それに対処するため、世界的にリスク管理の強化がいられている。リスク管理強化に向けて、大手金融機関は全社的なデータ管理の態勢整備やリスク管理手法の高度化を迫られている。またリスク管理の手段としての各種金融商品は、世界中のさまざまなデータの相関性を分析した結果として発明される。ITが、その原因の一つとなっているグローバル金融市場の不安定性に対抗するために、世界中の事象の相関関係をITでとらえて武器を作る。まさに「Fintech現象」と呼ぶに値する。

今のところ「Fintech」というと、金融機関によるITベンチャーへの投資活動に注目が集まりがちである。しかし、これは単なる一過性のブームではなく、金融機関による「Fintech現象」への果敢なるチャレンジと見るべきであろう。これまで幾度となく、「いずれITは水道事業のように付加価値の低いユーティリティーサービスに収斂していく」という予想を耳にしてきた。しかし、そのような世界は来ないのではないかと思いたくなるほど、ITはとどまるところを知らず、落ち着き先が分からぬまま、世の中を変革し続ける。

(おかいやすき)